

2025年4月6日（大齋節第5主日、C年）

牧師メッセージ

「ささげ物の香り」

（ヨハネによる福音書12: 1-8）

司祭ヨセフ太田信三

大齋節も後半に入り、イエスの受難、そして復活が近づいてきました。

イエスは十字架に向かう直前、ベタニアの大事な三兄妹のところを訪れました。食事の時、妹のマリアは高価なナルドの香油を一リトラも持ってきて、イエスの足に注ぎました。それは当時の労働者の約1年分の賃金に相当するほど高価なものであったと言われていいますから、常識では考えられない大胆な行動でした。マリアはその香油を惜しみなく注ぎ、自分の髪でイエスの足を拭きました。そこには、イエスに対する深い信頼と愛がありました。そして、やがて来るイエスの埋葬を先取りするかのような信仰的直感に満ちたものでした。

さて、それを見たユダは「これは無駄だ」と言い放ちました。さらに、「貧しい人に施せたのに」ともっともらしい言葉を続けましたが、そこに込められた思いは寂しいものでした。マリアの行動が「損得」ではなく「愛」によるものであったのに対し、ユダの言葉は計算されたもので、イエスよりも自らへと思いが向かったものでした。両者の間には、イエスに対する姿勢の根本的な違いがあったのです。

イエスはマリアの行動を受け入れ、「私の埋葬の日のために、それを取っておいたのだ」と言われます。そして、「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない」と続けました。これは、マリアが「今しかできないこと」を見極め、心からの愛をもって応えたことを認めた言葉です。

マリアが注いだ香油の香りは家中に広がりました。それは彼女の愛と信仰の象徴であり、目には見えずとも確かに存在する「神へのささげもの」の力を表しています。私たちのささげ物の香りはどうでしょうか。今日、この礼拝にどのような心持ちでいるでしょうか。振り返りたいと思います。そして、私たちのささげ物が、人々の心に残る「香り」となりますように。私たちもまた、マリアのように惜しみなく主にささげる者でありたいと願います。